

海外における「地域支援」としての「場づくり」に関する実践と考察

—インドネシア東ジャワ州での日本語教育支援／教師支援における
「ソフトシステム方法論」の導入と成果—

Creating networks as a community Japanese Language support in overseas
-An attempt of introducing “Soft System Methodology” for supporting Japanese language
education and teachers in East Java, Indonesia -

松本剛次（国際交流基金マニラ日本文化センター）
MATSUMOTO Koji (The Japan Foundation, Manila)

要 旨

「ソフトシステム方法論（SSM）」の考え方を取り入れた地域支援実践を行い、その成果について検討した。結果として、参加者自身により状況が意識化され、改善のための行動が計画、実施され、新たな展開も生まれるなど、SSMは場を再認識・再構成し、参加者の意識と行動を変革して行くための一つのツールとして機能しうることが確認できた。この変革を一時的なものではない継続的なものとしていくことが今後の課題である。

A methodology called ‘Soft Systems Methodology (SSM)’ was introduced to create and recreate networks of high school Japanese language teachers in East Java, Indonesia. As results, situations were described clearly by the teachers themselves and innovative plans were also designed and conducted by them. As a tool for renovation, SSM would be useful, although we need to discuss further about how we keep the results and how we keep improving the situations.

【キーワード】 インドネシア、地域支援、場づくり、高校日本語教師会、
ソフトシステム方法論（SSM）

1. 目的

本稿はインドネシア東ジャワ州における中等日本語教育支援、特に高校日本語教師会活動計画の作成に関する実践報告であり、それを通じた場づくり、地域支援についての考察である。筆者は2011年11月から2014年6月まで、国際交流基金派遣日本語上級専門家としてスラバヤ国立大学に籍をおいて地域支援に当たってきた⁽¹⁾。それ以前の経験や実践などから、地域支援型の派遣専門家の場合、現地日本語教育ネットワークへの支援を通して現地の日本語教師への支援を行うこと、言い換えれば場への支援と人への支援を行うことがその業務の中心であり、そのためにはその場がどういうものであり、どこに問題があり、それをどう変えていくべきなのかをその場の関係者全員で共有し、実行に移していく必要がある、と考えていた。そしてそのようなことを考えていた時に出会ったのが以下に述べる「ソフトシステム方法論（Soft Systems Methodology（以下「SSM」）」の考え方であった。本稿はそのSSMの考え方を取り入れた実践の報告であり、SSMの枠組みを借りることで関係者がその場を認識し、それを変えていくことができうることを論じるものである。

なお、本報告は実践研究フォーラムの報告でもある。フォーラムでの対話型セッションではSSMを一つの切り口としそれぞれの現場での地域支援としての場づくりについて話し

合うグループワークが行われた。そこでの議論についても報告する。

2. 「ソフトシステム方法論 (SSM)」

2-1. 「ソフトシステム」という考え方

SSMはP・チェックランドらにより開発された方法論であるが、その出自がシステムズエンジニアリングの流れによることもあり、現在では主に工学分野や経営分野において取り入れられている。しかしWillson(1990)、内山(2007)、竹村(2004, 2007)などが指摘しているように、そもそもSSMとはソフトシステムにおける問題解決を目指すもの、当面の問題の解決と今後の継続的な問題解決を目指すもの、そのための方法論である。そこで言う「ソフトシステム」とは「モデル化言語が「活動」から構成されるような相互作用しあう人間活動システムの集合」(Willson 1990)と定義されるものであり、これは「モデル化言語として数学を用いることができるような、物理的な人工システム」である「ハードシステム」と対立する概念である。そして本実践が対象とするような日本語教育ネットワーク、即ち地域支援における「場」とは、まさにこの「ソフトシステム」である。

2-2. SSM—その考え方と手順

SSMでは以下に示すような7つのステージを辿ることで、特に「現実」と「概念上のモデル」とを行きつ戻りつすることで、当該のソフトシステムを分析、意識化し、その上でそれを変えていくことを目指している。これらのプロセスを通して「場」を理解し、それを再認識、再構成した上で実践に繋げていこうというものである。以下、Willson(1990)、内山(2007)等を参考にSSMの考え方と手順について簡単にまとめる。

ステージ1・2：問題状況の認知と把握

ステージ1・2では問題の状況を全体として把握することが目的とされる。問題状況に対する見方・考え方は各自異なるものであるが、ここでは絵や文章を使って、各自の「思い」が表現される(ステージ1)。そのようにして可能な限り多くの問題認知が集められた上で、それらを最大限に含んだ絵(「リッチピクチャー」)や文章(「〇〇とは△△のシステム」という形で記述され「関連システム」と呼ばれる)が作成される(ステージ2)。

ステージ3：根底定義の作成

ステージ2で得られた絵や文章を元に「Zのために、Yによって、Xするシステム」という形で問題となっているソフトシステムに対する「根底定義」が与えられる。当然問題状況に対する見方・考え方の違いから「根底定義」は複数作成される。そしてこれらを比較検討したり、修正したりすることで関係者間での「アコモデーション」(思いの合意)が行われる。ここで問題とされるのは「どの根底定義が正しいか」ではなく「どれが自分の関わっている状況によりふさわしいか」である。

ステージ4：概念活動モデルの作成

ステージ3において合意された根底定義について、それを7プラスマイナス2ぐらいの数の動詞で表される活動への変換が行われる。「どういうこと」から「どうすること」、「Beモデル」から「Doモデル」への変換であるとも言われる。ステージ3の時と同様、これらの活動は参加者間での比較検討や修正のプロセスを通して行われる。必要があればステージ3の段階に戻ることもある。

ステージ5：概念活動モデル（ステージ4）と現実（ステージ2）の比較

ステージ1・2が「現実」の問題についての議論であったのに対して、ステージ3・4はその問題を「概念化」「モデル化」しての議論であった。そしてそれを再び「現実」にぶつけ、現実世界に関する新たな発見、新たな思いを引き出すのがこのステージである。具体的にはステージ4で出てきた「活動」に対して、現実世界においてそれがどのように行われているか、どのように評価されているかなどを表にして整理する活動が行われる。

ステージ6・7：実行可能で望ましい改革案の作成と問題状況を改善するための行動

以上を踏まえた上で、現実を実際に改革する行動計画（アクション・プラン）が作成される（ステージ6）。論理的にもシステマ的にも望ましく、社会的・文化的な現実に基づいた実現可能な改革案（改善案）が弁証法的に作成される。そして実際に改革案を実行される（ステージ7）。

3. 「SSM」の考え方を取り入れた東ジャワ州高校日本語教師会活動計画の作成

3-1. 問題状況の認知と把握（ステージ1・2）

以上のようなSSMの考え方を取り入れて東ジャワ州高校日本語教師会（以下「教師会」）の活動の見直し作業が行われた。この作業が行われることになったのは、教師会の会長が交替し、新会長から筆者が相談を受けたことがきっかけであった。会長以下新しい役員は皆若い世代のものであり、教師会の活動が固定化・停滞化している現状に問題を感じていた。また活動の多くが都市部であるスラバヤ市で行われていることにも疑問を感じていた。

まず、第一段階として行われたのは、問題状況の認知と把握の作業であった。この作業は教師会によって3～4ヶ月に一度のペースで行われている「勉強会」での活動として行われた。そしてそれに先立ち大学院の授業の一環として準備作業が行われた。

この大学院は日本語・日本文学教育専攻の大学院（修士課程）であり、筆者もそこで授業を担当していた。院生は全員（6名）が高校で日本語を教えている現職の教師である⁽²⁾。現場の問題意識を抱えて大学院に進学しているものであり、教師会を舞台としたSSMを行うにあたり協力してもらうのに適任の者達であった。そこでまずはリハーサルのために彼らにSSMの考え方・やり方について体験を通して学んでもらい、その後の「本番」としての東ジャワ州高校日本語教師会の活動においてはグループでのディスカッションにおける進行役、グループリーダーを担当してもらうこととした。

勉強会は2013年4月27日に行われた。この日は「高校の日本語教育の問題と高校日本語教師会の役割について考えよう」というテーマの下、まずは旧教育大学であり現在でも地域の教員養成の拠点であるスラバヤ国立大学の日本語教育プログラム長、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターの現地講師、在スラバヤ日本総領事館の日本語教育支援担当者から、それぞれが今、どのような考えの下、どのような活動を行っているかについての発表があった。その後で10～12名ずつの6グループに分かれ、現在、教師会及び東ジャワ州の高校の日本語教育ではどのような問題があるのか、問題解決のために教師会はどのようなことができるか、などについての話し合いが行われた。具体的には自由に意見が述べられるよう、ブレインストーミングのルールとして「判断の先送り」「自由な展開」「質より量」「組み合わせと改良」という点を確認した上で、既にSSMのやり方を経験した教師会員でもある大学院生がそれぞれのグループのグループリーダー（議論の進行役兼記録役）

として入る形で意見のやり取りが行われた。次の表1がグループリーダーが記録したあるグループでの「思い」と「状況認知」の日本語訳である。なお表内にある「JF」とは「国際交流基金(The Japan Foundation)」のことである。

表1 教師会、及び高校の日本語教育についての「思い」と「現状認知」の例

- ・ 教師会が効率的ではない、生産的でない。おしゃべりしてばかり。
- ・ 教師会勉強会参加の人数が多すぎる。
- ・ 勉強会の時、前の方の人は話を聞いているが、後ろの方の人はおしゃべりしている。
- ・ それぞれの学校で問題/状況がちがう。
- ・ 教師会で一つの解決例を聞いてもそれが使えない。
- ・ 教師会はJFの考え方を受け入れるが、教育省の考え方をあまり受け入れない。教育省とのネットワークがない。
- ・ 教師会にはJFからの協力はあるが、教育省からの協力は無い。
- ・ 教育省のオリンピアード(学習成果の発表会)が日本語、外国語はない。教育省は外国語にあまり援助をしない。
- ・ 教科書の問題。他の科目は教育省が準備するが、日本語は先生が準備しなければいけない。
- ・ 他の科目の教師会は政府からの予算があるが、日本語はない。
- ・ 学生のモチベーションが低い。先生は努力しているが…。
- ・ 高校生/大学生はまだ大人じゃないので、考え方がしっかりしていない。
- ・ 語学専攻クラスの場合、卒業試験のために勉強している。
- ・ 職業高校の場合、職業実習から帰ってくると日本語(特にかな、漢字)を忘れてしまう。

その後十分な「思い」「問題認知」が出てきたと思われる時点で、今度はそこで出てきたものを最大限に含む形で、「教師会とは○○するところ」という文章(SSMでいうところの「関連システム」)にまとめてみる作業が、これもグループごとに行われた。表2に示すのが表1と同グループが作ったものである。なお勉強会の最後には各グループによる「思い」や「問題認知」、及び作成された「関連システム」が発表され、全体としての「思いの共有」「確認」が行われた。

表2 「教師会についての関連システム」の例

- ・ 教師会とは市、町の代表が話し合うところ。
- ・ 教師会とはリーダーが問題を話し合うところ。
- ・ 教師会とは教育省と協力するところ。
- ・ 教師会とは他の州の教師会とも協力するところ。
- ・ 教師会とは州の中(市、町、大学、日本語学校など)で協力するところ。
- ・ 教師会とは高校生のために授業の問題を改善するところ。
- ・ 教師会とは高校の先生が研修をするところ。
- ・ 教師会とは先生が勉強するところ。

3-2. 「根本定義」「概念活動モデル」の作成と「現実」との比較、そして実現可能で望ましい改革案の作成（ステージ3～6）

勉強会終了後、日を改めて各グループのグループリーダーであった大学院生が集まり、SSMのステージ3としての「根底定義」の作成の作業が行われた。全てのグループから出てきた「関連システム」を比較、検討、統合、修正し、「Zのために、Yによって、Xするシステム」という形で「アコモデーション（思いの共有）」としてまとめる作業である。その結果表3に示す「根本定義」が作成された。

表3 教師会についての「根本定義」

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・ 教師会とは外国語教育の存在を高めるために教育省や市、町の教師会などと協力するところ。・ 教師会とは情報交換のために、大学、日本語学校、職業高校教師会などと協力するところ。・ 教師会とは授業の問題を改善するために高校の先生が勉強、研修するところ。・ 教師会とは先生達の知識、経験を高めるために、高校の先生が勉強、体験するところ。・ 教師会とは学生、先生、学校のモチベーションを高めるために日本人との接触の機会を増やすところ。 |
|---|

このようにして作成された根底定義について、次に、ステージ4としてそれらを7プラスマイナス2ぐらいの数の動詞で表される活動に変換するという「概念活動モデル」の作成の作業が行われた。具体的にはまず表3としてまとめられた「根底定義」を活動の中核方針という形で「〇〇します」という文に書き換え（「Beモデル」から「Doモデル」への変換）、次に「それに対する具体的な方策・活動案」を、勉強会の際のグループリーダーであった大学院生達が議論を重ねながら「概念活動モデル」として作り上げるという作業が行われた。そのようにして作成された「行動計画案」が次ページに示す表4の左側部分である。

その後、今度はSSMでのステージ5として「概念活動モデルと現実との比較」の作業が行われた。この作業は大学院でのグループリーダー間での話し合いから、教師会会長をはじめとした教師会役員間での話し合いへとその場と参加者を変えて行われた。ステージ4では「参加者間での比較検討」が重要であったが、ステージ5で場と人を変えてそれを再検討することでより多様／多層な参加者による比較検討とするためである。

ここではまずグループリーダーとしての大学院生が作成した「根底定義」と「行動計画案」について、それらが参加者である教師会役員それぞれの「思い」と合致しているかどうかの検証（「アコモデーション」の検証）が行なわれた。そして結果として、教師会役員も同じ「思い」であることが確認された。次に一つ一つの「活動計画」に対して、「現在既に行われているか」「行われている場合どのように行われているか」「行われている場合どのように評価されているか」「行われていない場合、実現の可能性はあるか」という「現実との比較」の観点から表にしてチェックし、その優先度（◎、○、△、×で記述）とコメントをつけていくという作業が行なわれた。それが表4の右側部分で、今回作成された「行動計画（アクション・プラン）」である。

表4 「活動計画案」とそれに対する優先度・コメント

	優先度・コメント
<p>1. 外国語教育, 日本語教育の存在を高めるために, 教育省や市, 町の教師会等と協力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教師会の活動に州の教育省の人を招待します。 ・ 教師会の活動について州教育省に提案, 報告をします(予定表, 予算など)。 ・ 市, 町の代表が州レベルでの教師会に来るようにします。 ・ 市, 町の代表は帰ってから町, 市の教師会で報告するようにします。 ・ 市, 町での教師会の会議, 勉強会をより活発にします。市や町で勉強会を行う場合, JF 認定インストラクター, スラバヤ国立大学教師, JF の専門家などを送ります。修了書も作成します。 	<p>○ 連絡, 招待状を送る</p> <p>○ 報告書を送る</p> <p>× 要検討(今後の議題)</p> <p>× 要検討(今後の議題)</p> <p>◎ 希望する市や町は会長に連絡</p>
<p>2. 情報交換のために大学, 日本語学校, 他の日本語教師会などと協力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 職業高校教師会の会長を州の教師会にも招待します。 ・ 職業高校教師会といっしょにイベントの計画を立て, 実施します。 ・ 大学の文化祭に高校生, 中学生が参加します。 ・ 大学の先生に勉強会の講師として来てもらいます。 ・ 日本語学校の代表と話し合う機会を作ります(コース料金など)。 ・ 領事館で毎月行われている「日本語教育関係者会議」に教師会の代表も参加します。 	<p>○ 招待状を送る</p> <p>× 予算の関係上難しい</p> <p>○ 既に行っている</p> <p>○ 既に行っている</p> <p>△ 現状では難しい</p> <p>△ 総領事館と相談</p>
<p>3. 授業の問題を改善するために高校の先生が勉強, 研修します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教え方, 教授法等についての勉強会を行います。 ・ 授業の流れ, 教案の書き方についての小研修を行います。 ・ 小研修の次のレベルの研修として, 東ジャワ州での基礎研修を行います。 ・ 教科書, 練習帳などの教材を作ります。 ・ マルチメディアの教材を開発します。 ・ マルチメディアを使わない先生のための教材を開発します。 ・ Sekolah Inklusi (障害者クラス) のための教材を開発します。 	<p>○ 既の実施。当面はレッスン・スタディを重視</p> <p>○ 既に行っている</p> <p>◎ JF と相談。</p> <p>○ 「練習帳」の作成</p> <p>△ 将来の実施を検討</p> <p>△ 将来の実施を検討</p> <p>△ 将来の実施を検討</p>
<p>4. 先生達の知識, 経験を高めるために, 高校の先生が日本語の勉強や日本文化を体験します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 日本語能力試験のための勉強会を行います。 ・ 文化体験の機会を作ります(折り紙, お茶, 書道, 料理, 浴衣, 踊りなど) ・ 先生のための文化祭を計画し実施します。 	<p>○ 既に行っている(スラバヤ国立大学と共催)</p> <p>△ 日本人会と相談</p> <p>△ 将来の実施を検討</p>
<p>5. 学生, 先生, 学校のモチベーションを高めるために日本人との接触の機会を増やします</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 領事館, JF と合同の活動を計画し, 実施します(学校訪問, 文化セミナー/体験, 新しい情報, 映画会など) ・ 教師会のイベントに東ジャワ日本人会の人を招待します。 ・ 東ジャワ日本人会と合同の活動を計画し, 実施します。 ・ 日本人学校と話し合い, 学校訪問などの可能性について考えます。 	<p>△ 総領事館と要相談</p> <p>△ 日本人会と相談</p> <p>△ 日本人会と相談</p> <p>△ 日本人会と相談</p>

3-3. 「行動」(ステージ7)

以上のプロセスを経て作成された「行動計画(アクション・プラン)」はその後の勉強会(2013年9月14日)において確認され、2013年12月にスラバヤ国立大学で行われた国際セミナー「東南アジアにおける中等日本語教育と教師研修」でも教師会会長により発表された。

表4において優先度が高いとされた項目(◎, ○が付けられたもの)についてはその後コメントとして提案されたことのほとんどが実行に移された。しかし筆者の任期が終了した2014年6月末時点で言えば、その後の更なる展開へとつながったものもあれば、つながらなかったものもあった。例えば市や町レベルでの勉強会の開催、特に「レッスン・スタディ」といった形での地方での勉強会開催や、教育系大学であるスラバヤ国立大学との連携、領事館で行われている「日本語教育関係者会議」への教師会代表の参加などにはその後の進展が認められたが、一方州の教育省の関係者を勉強会に招待したり、報告を行う等の活動については招待状を送っても教育省側からの反応がなく進展はほとんど見られなかった。これらの点については次章で改めて考察する。なお「日本人会との相談」など優先度が低いとされたもの(△が付けられたもの)についてはまだ手が付けられていない状態である。

4. 考察

4-1. 「当面の問題解決」の観点から

以上、SSMの考え方を取り入れた教師会の行動計画の作成とその後の展開について述べてきた。2-1で見たようにSSMはソフトシステムにおける問題解決を目指すもの、当面の問題の解決と今後の継続的な問題解決を目指すものである。そしてそれは必然的に当該のソフトシステムを分析/認識することでもあり、そのソフトシステムを変えていくこと、つまりはソフトシステムを再認識・再構成することでもある。ここではまず「当面の問題の解決」として「教師会」というソフトシステムがどう認識され、どう再構成されたかその変化を見てみたい。

ここで注目したいのはJF(国際交流基金)との関係性の変化、その認識の変化である。「問題状況の認知と把握」の段階であるステージ1・2で表1にあるように「教師会はJFの考え方を受け入れるが、教育省の考え方をあまり受け入れない」「教育省とのネットワークがない。教師会にはJFからの協力はあるが、教育省からの協力はない」という声が聞かれた。ここから教師会員は教師会とJFとの関係を強いものとして意識していることが確認できる。登里・小原・平岩・斎藤・栗原(2007)には2006年当時にJF(登里らは「ジャカルタ日本文化センター」と表記)が目指していた教師会を支援の対象の中心としたネットワークのイメージが図で示されている。それを見る限り矢印で示されている教師会への支援はすべて図の上部に記されているインドネシア教育省と連携しているジャカルタ日本文化センターから来ており、トップダウン的なものであるとともに一方向的なものである。もちろんこれは当時のJF側の考えであるが、教師側、教師会側にもJFとの結びつきが強いものとして意識されていたのは先に見た通りである。

ではこのような「状況認知」はその後どう変化したであろうか。ステージ3の「根底定義の作成」は「どれが自分の関わっている状況によりふさわしいか」を考え記述する段階

であるが、表3を見ると「教師会とは外国語の存在を高めるために教育省や市、町の教師会などと協力するところ」「教師会とは情報交換のために、大学、日本語学校、職業高校教師会などと協力するところ」とJF以外の具体的な組織名を挙げた上で、それらとの繋がりを強化し、拡大していくことが示されている。そしてステージ4以降、表4で示した「行動計画」では、「教育省や市、町の教師会等と協力します」「大学、日本語学校、他の日本語教師会などと協力します」「日本人との接触の機会を増やします」などを宣言し、またコメントとして「(州の教育省に)連絡、招待状を送る」「報告書を送る」「領事館と相談」「スラバヤ国立大学と共催」「東ジャワ日本人会と要相談」などが記されている。ここから一連のSSMの実践を通して、教師会という「場」の認識が、JFの影響の強いものという認識からインドネシア側や日本側の様々な組織との連携を重視するものという認識へと変化したことが確認できる。「当面の問題の解決」とそのための「場の認識と再認識(再構成)」という観点からは今回のSSMの実践の成果があった、と言えよう。

4-2. 「今後の継続的な改善」の観点から

次にSSMのもう一つの特徴である「今後の継続的な問題解決」の観点から今回の活動を評価してみたい。

確かに3-3で述べたような市・町レベルでの「レッスン・スタディ」の展開など、学習サイクルが動き出したと考えられる事例はある。そしてその際の中心的な役割を担っているのは今回のケースで言えばグループリーダーとなった現職教師でもある大学院生や教師会の役員などであり、その事実から参加の度合いの高かった者に対しては「学習サイクル」を活性化させることができたのではないかと考察される。しかし一方では例えば州の教育省との連携のようにサイクルとして動かない、動きが止まってしまっている事例もある。もちろん教育省側の反応による部分が大きい事例ではあるが、現時点では相手側のそのような反応に対し、「次の一手」が打たれているわけではない。いわゆる「あきらめ」の状態であり、そこでは「参加者が今後も常に自分たちで問題解決に当たれる」ことができてはいない。したがってこの点からは少なくとも現時点において「今後の継続的な改善」については十分な成果は見られなかったと言わざるを得ない。

5. 「対話型セッション」での議論

では、今回のSSMの実践の結果見られた「当面の問題の解決」で終わらず、それを「今後の継続的な問題解決」へとつなげてしていくにはどうしたらよいであろうか。筆者の実践例を紹介した後で、SSMを一つの例、一つの切り口とし、地域支援のあり方、地域支援としての「場づくり」について対話を通して考えるべく行われた2014年度実践研究フォーラムの対話型セッションでの議論もこれに関係したものとなった。

対話型セッションでは筆者による発題発表の後でグループに分かれ、各自の現場でSSM的なやり方を実践したと想定した場合、どんな問題が考えられるか、何が難しいか、何ができないかについて話し合い、それらを整理した上で、どうすればそれを乗り越えことが可能か、「地域支援としての場づくり-その問題点と対策」というテーマでポスターを作り、最後にそれを見せ合う形での意見交換が行われた。具体的にはグループはその支援の場所と対象から①国内で学習者支援に当たっている「国内学習者」グループ、②国内で教師支援

に当たっている「国内教師」グループ、③海外で学習者支援に当たっている「海外学習者」グループ、④海外で教師支援に当たっている「海外教師」グループの4つが設定され、それぞれのグループに3~4名の参加者が振り分けられた。アイスブレイキング的にそれぞれの参加者が現在、または過去においてどのような現場でどのような活動に取り組んでいるかがグループ内で紹介された後、先に述べたような話し合いを通してのポスター作りとその発表の活動が行われた。

結果としては「国内学習者」グループからは「ステークホルダー（関係者）の意識が欠如している」「ステークホルダーが多すぎる」「そもそも主要なステークホルダーである留学生の生活実態や日本語使用状況がよく分からない」などが問題点として挙げられ、これがクリアされない限りはステージ1に進むことが出来ない、という点が指摘された。また「海外学習者」グループからは海外の現状として「教師不足」「教材不足」「日本についての情報の不足」といった問題点が挙げられ、このような問題はSSMだけではある程度は改善できるとしても限界もあるだろうという点が指摘された。一方、これに対し「国内教師」グループからは「まず仲良くする」「相談してみる」「集まる」といった「ステージ0」の段階があり、その上で行ったり来たりしながらステージは進行していくものだろう、という意見が提示され、また「海外教師」グループからも「とりあえずやってみる」「繰り返す、あきらめない」というスタンスが大切なのでは、という意見が提示された。そしてこれらを踏まえての全体での議論では、「はじめの一步」としてのステージ1自体が既にそれ以前の何らかの活動の結果／成果を踏まえた上での「継続」なのでは、という見解が提示され、だからこそ「とりあえずやってみる」というスタンスが大切なのでは、進めることでその必要性にも気づけるし、螺旋的な展開が期待できるのではという意見や、「はじめの一步につなげるにはトップダウン的なやり方も場合によっては必要であるし有効」「インフォーマルなものも含めた様々なネットワークがその際の役に立つ」という意見が挙げられた。また、そもそも「支援」とは何か、どういうことか、という議論から「支援の一つの形として持続可能、継続可能な状態に持っていくことがある」という意見も提示された。筆者の東ジャワ州での実践でも「今後の継続的な問題解決」へとつなげていくことが課題とされたが、ここでもやはり「はじめの一步」や「次の一手」へとどうつなげていくか、継続可能な状態にいかにして持っていくか、それが問題であり課題であるということが確認された。

なお、対話セッションにおいては「場」を作り、それを持続させ且つ停滞化、形骸化させないためには常に問題と目的が全ステークホルダーに目に見えるようにしておくこと、常に問題や目的について考えられるようにしておくことが必要「目的自体が変わることもあるのでそれについても常に考えることができるようにしておくことが大切」「支援に当たるものは、特に海外の場合、外部の者（アウトサイダー）であると同時に内部の者（インサイダー）であるという意見が必要」といったことが一応のまとめとして提示された。そしてSSMはそのための方法論、問題や目的の視覚化と共有化のための方法論としては有効なのでは、またそのように外部の者としての視点と内部の者としての視点を持って問題と目的を目に見える形にすること、そしてそれを考えて行動に移すことこそが「実践」であり「実践研究」であろう、という話になった。地域支援のあり方、地域支援としての「場づくり」について考えるのがこのセッションも狙いであったが、期せずして最後は「実践研究とは」という話になった。

6. まとめと今後の課題

最後に改めて課題として提示された「はじめの一步」「次の一手」「継続可能性」について考察し、本稿のまとめとしたい。この議論はニワトリが先かタマゴが先かという議論に似ている。スタートとしての何らかの活動をタマゴとすれば、そのタマゴ自体が何らかの活動の結果であり、同時にニワトリ自体もタマゴが成長した結果であるという意味においてである。

結論を言えばこの両者は循環的なものであり、どちらが先とは言えない。どちらかを変えたいと思えば、そのつながり自体を変える必要があるであろう。「場づくり」で言えばそれは場を認識し再認識（再構成）することである。場の認識が変わればタマゴとしての次の一手も変わるし、それが変われば結果としてのニワトリも変わる。ここでの持続可能性、継続可能性とは決してある状態を維持することではなく、状態自体を常に認識／再認識する状態を維持するということである。そしてSSMもそのための一つの方法である。

先に対話型セッションでの議論が最終的には期せずして実践研究の話になったと書いたが、それは期せずしてではなく必然的なものであったとも言えよう。常に場を認識し再認識、再構成するのが「場づくり」であれば常に実践を認識しそれを再認識、再構成するのが「実践研究」ということになる。本稿も「場づくり」という筆者の「実践」の現段階での認識であり再認識でありその意味で実践研究である。それを継続していくこと、そして実践を通してそのための方法論を更に追求していくこと、それが今後の課題である。

注

- (1) ここでいう「地域」とは単に地理的な意味での「地域」である。しかし支援の対象が「日本語教師」という職能集団であり、その意味では「活動の地域が近いある職能集団の集まり、コミュニティ」と定義されるものである。
- (2) 全員が東ジャワ州の出身である。インドネシアは多言語・他民族国家でありそれぞれに「地方語」があるが公用語はインドネシア語である。授業での議論は基本的にすべてインドネシア語で行われたが筆者が参加した際など部分的には日本語も使用された。後に述べる勉強会や教師会役員との話し合いも同様である。

参考文献

- (1) 内山研一 (2007) 『現場の学としてのアクションリサーチ ソフトシステム方法論の日本的再構築』 白桃書房
- (2) 竹村哲 (2004) 『ヨコ型コミュニティ開発のための社会的アクションラーニングの方法』 海文堂
- (3) 竹村哲 (2007) 『自分らしさのシステム思考 自我自律性の仮説実験授業』 ナカニシヤ出版
- (4) 登里民子・小原亜紀子・平岩桂子・齊藤真美・栗原明美 (2007) 「インドネシアの中等教育における日本語教育ネットワーク形成 ―現地化・自立化を目指す支援策として―」 『国際交流基金日本語教育紀要』 3, 29-44
- (5) Brian Willson (1996) 根岸龍之監訳『システム仕様の分析学 ソフトシステム方法論』 共立出版株式会社